【35】暗闇の恐ろしさ

　マンションの火災で、玄関のドアを開けるのが間に合わず、住民が室内で焼死したというニュースを聴いて、マンション住まいの私も他人事でなく、自分なりの防災避難の練習をしてみました。
　停電という条件下すべての部屋の電気を消して真暗闇（まっくらやみ）にして、記憶と手探りとで廊下から玄関へ出てドアを開け、マンションの共用廊下へ出る練習です。

　室内の廊下は狭いので手探りで進み、靴脱場へ降りる段差から先の暗闇の空間では手を伸ばして何とかドアを見つけました。
　さてドアを開けようとすると、ドアのロックを解除するラッチ（かけがね）が無いのです。
　予想外のことに驚き、ドアの表面を上から下まで撫でまわしても、ノッペラボーでラッチどころかドアのノブ自体が見つからないのです。
　これはどうしたことかとパニック状態になりましたが、本当の避難でなく練習だったと思い出して落着くと、これはドアではないと気付き、すぐ横にあったドアを開けることが出来ました。
　共用廊下から光が入ってきて明るくなり事情がわかりました。
　何のことはない、私はドアではなくドアと直角の壁と格闘していたのです。
　ドア、ドア、ドアと焦っていた気持ちがあったので、暗闇の中で部屋の廊下から靴脱場へ降りるとき、手でさわった平らな壁をドアと錯覚したのです。
　靴脱場を介してドアに向かうとき左側へ 90 度曲がるのですが曲りすぎてしまったようです。

　これが本当の火事だったら、私はドアの傍らで死んでおり、消防や警察の係官が首をひねるところです。

　事故や災害に商売柄関心があり、いくつも記事を書いて専門家の積りだった私にとっては屈辱的なヘマであり、誰にも見られなかったのは幸いでした。
　暗闇での人間の感覚の無力さと恐ろしさ（別にお化けが出るわけではありません。）を今さらのように知り、この年齢になって勉強になりました。